

大学生と地域住民による 「小さな自治」の実践



大阪国際大学 「ひと・まち・であう」プロジェクト

個性豊かな「ひと・まち・であう」Pメンバー紹介

- **代表** : 小竹森 晃(岡山生まれで不良あがいの熱血野郎)
 - **幹事長** : 関口 翔平(京都生まれの活動家 バナナマン似)
 - **4** : 麻島 大輝(大阪生まれの格闘家風 だけど超優男)
 - **4** : 松田 良 (京都生まれの人妻好き **彼女募集中**)
 - **3** : 根岸 昂生(京都のアウトロー街出身 **ゼミ1の男前**)
 - **3** : 角野 正樹(大阪生まれの **遅刻野郎!** いつもヒヤヒヤ)
 - **3** : 上野 海斗(生まれは茨城育ちは大阪 **睡眠大王**)
 - **2** : 辻谷 浩基(京都の田舎育ち **学業優秀 いじられキャラ**)
-
- **教員** : 田中 優(**熱血教員 GTM**(グレートティ・チャ・まさる))

男くさ〜い、濃いメンバーですんまへん(° □ ° ;)



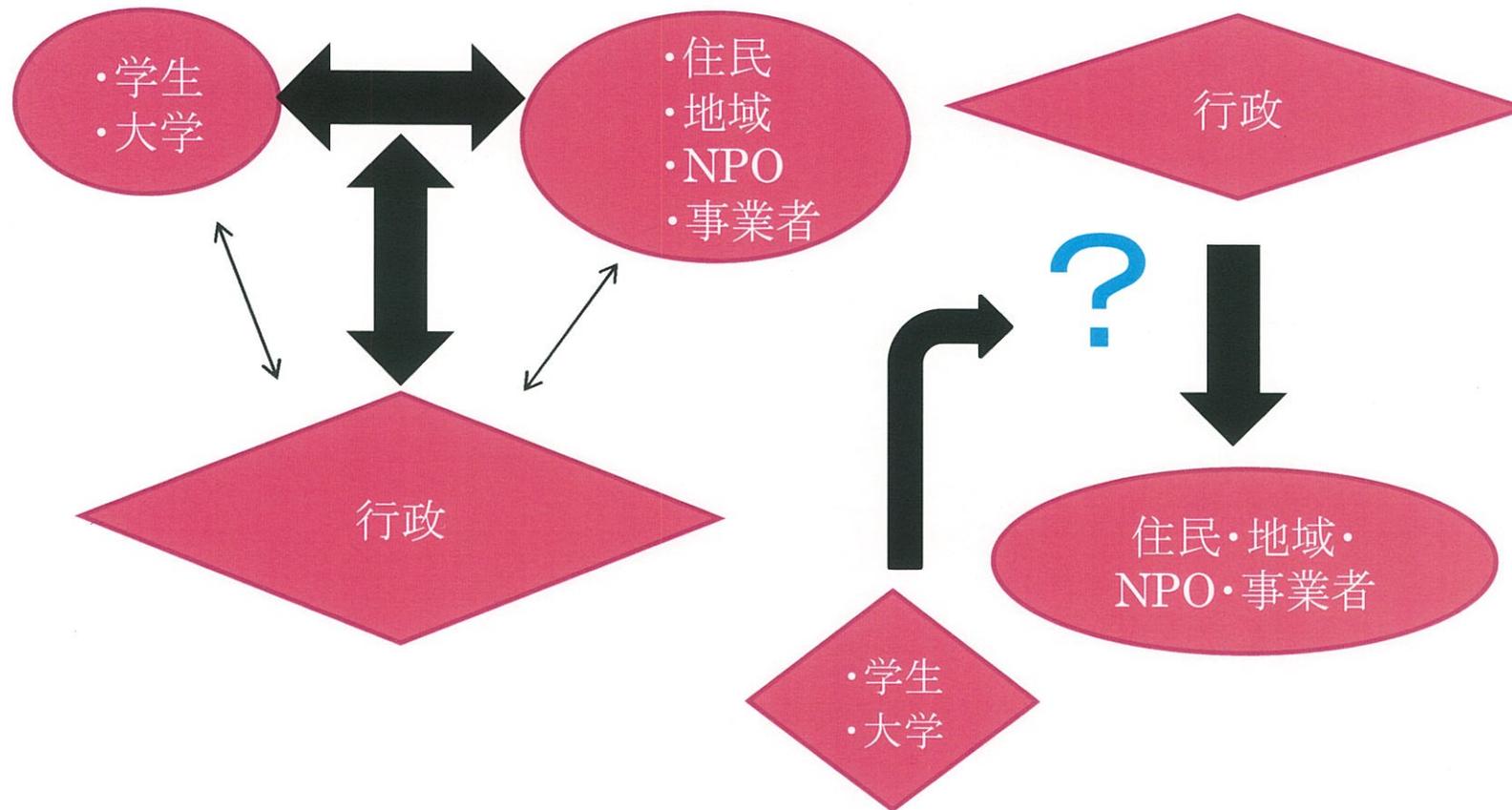
行政は地域住民を引っ張っていく(トップダウン)
存在ではなく、あくまで、地域住民のサポート的
な立場であるべきだ



目指すべきもの

菅原東・南山城での実践例

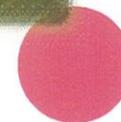
登別市の現状



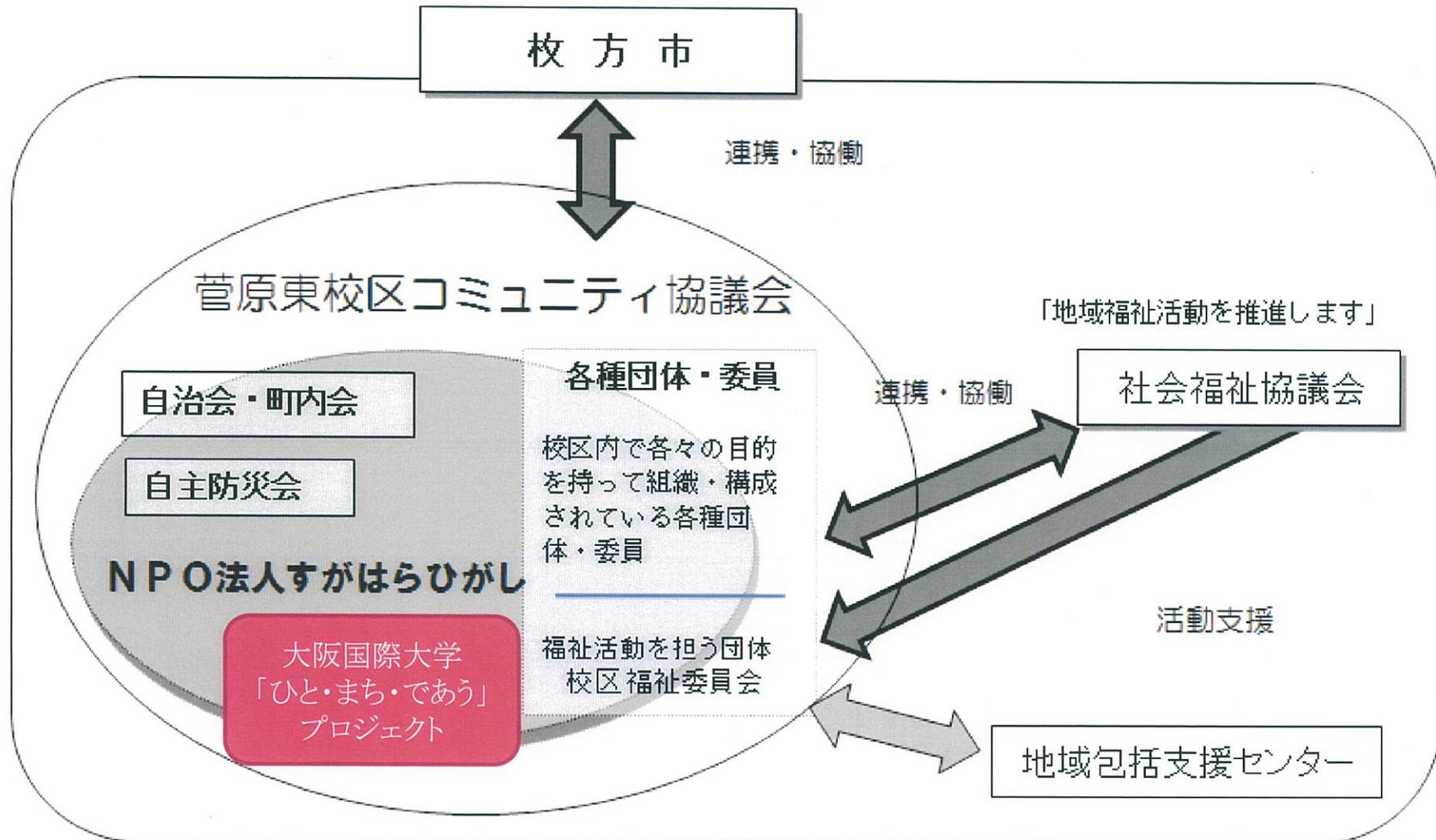
NPO法人「すがはらひがし」での活動事例

月一回、NPO法人の方々と、
活動に携わる学生を集め、
会合を開催

まちづくりへ向けた
生きた情報を交換し、協働の
企画をしている



NPO法人「すがはらひがし」の位置付け



地域コミュニティの運営に、NPO法人・大学が協働している

学生の視点で、地域の安全・安心を指摘



フィールドワークを行い、学生の気づき
を見つけ報告する

学生の提案が、防犯活動を促進させた



地域住民と学生の協働



地域の一員として積極的に、イベントへ参画

地域にとって「かけがえのない存在」へ



今後の活動を運営していくにあたり



- ・安心・安全マップを基に、防災マップを作成・活動
- ・地域の子供を地域で育てる、「ふれ愛フリースクエア」

これらを踏まえ、学生もまちづくりの一主体として、日常的に参画・協働していく

京都府 南山城村の概要

- 京都府南山城村
- 人口3000人 高齢化率30.9%
若者がおらず限界集落に近い
- 京都府唯一の村である
奈良県・三重県・滋賀県の県境にある
- 特産物は煎茶・しいたけ
- 宇治茶の生産量は実は南山城村がほとんどを占めている



南山城村での活動事例



- 2年前はテーマ設定のもと地域住民に聞き取り調査を行い報告会開催→村議会議員やNPO活動家が聴講
- 今年度(先月末開催)は村民のご協力のもと、**農家等で民泊型フィールドワーク**で寝食を共にし、リアルな意見を聞き取った
- 村長をはじめ村の活性化を考えている方々に報告会参加を呼びかけ→**村長・行政よりも協力的な住民が目玉**
- 村人の意識**をかえてもらうような働きかけを行っている



南山城村での活動事例

仮)南山城交流拠点センター一案

なぜ、交流が必要なのか？

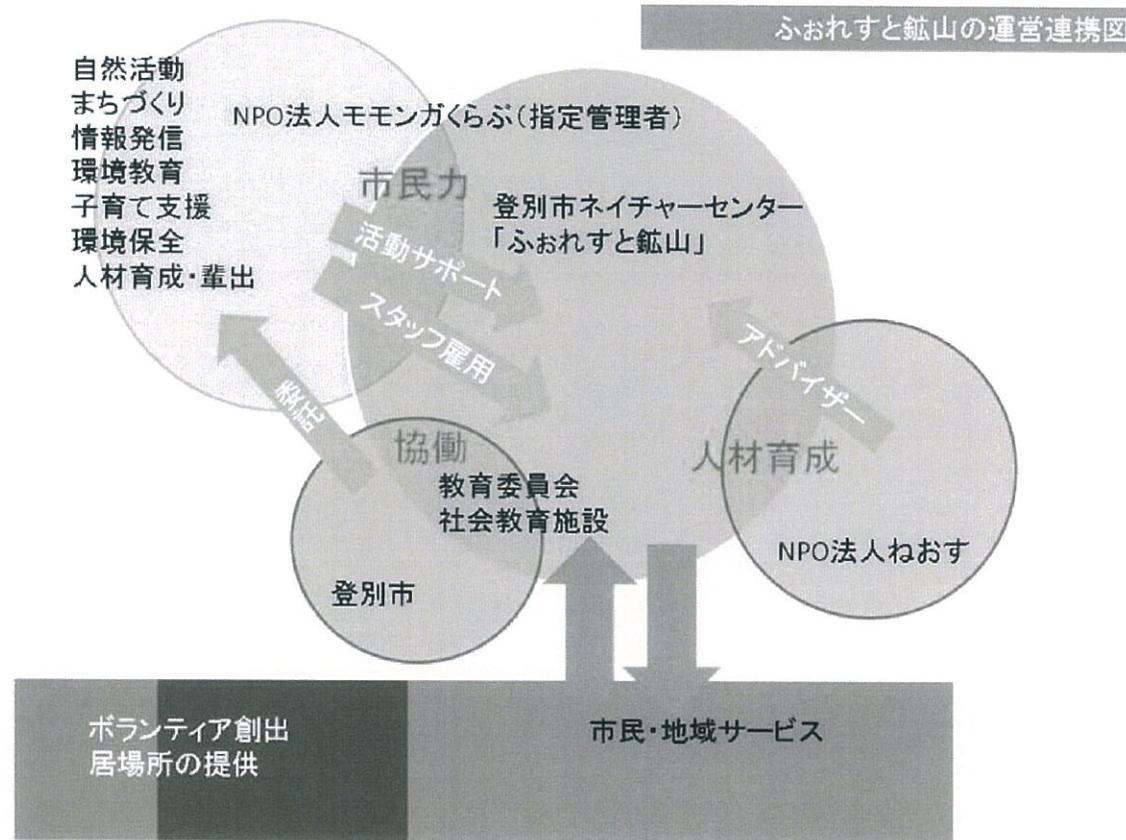
- 村内には複数の大学が活動している
しかし、大学間での交流はおろか、
地域住民との協働ができていないのが現状
そこで、廃校を利用し地域住民・学生・NPO等が
対話でき共に活動できる拠点を必要と考える



登別市での事例



NPO法人登別自然活動支援モモンガくらぶ



- ・2005年に法人格を取得した、萌芽期の団体
- ・行政のバックアップにて事業展開しているが、マネージメントは上手
例)室蘭工業大学「ランドスケープ研究所」
北海道大学などが、研究のフィールドとしている

NPO法人 いぶりたすけ愛

主な活動

- ・常設サロン
- ・在宅サービス
- ・グループホーム
- ・介護保険事業
などを行っている

今後、日本工学院の学生が、
共生型施設を建築設計予定



活動自体は、仲良くやっているし、熱心である
それぞれの活動団体のネットワーク構築を求めている

当初より、行政の委託事業は受けず、
自分たちで課題解決活動を行っており、
参加メンバーがそれぞれの得意な分野を持ち寄り、
出来ることから始めている。
＝「小さな自治」の実践！



私たちの政策提言

- ①新 学園都市構想案
- ②地域団体が情報の共有化・まちづくりの議論をする「プラットフォーム」の構築



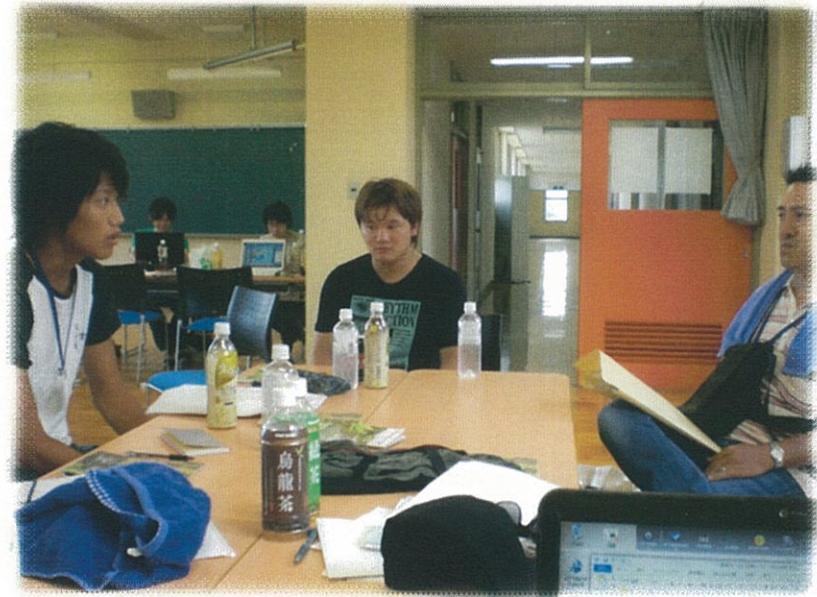
①新 登別学園都市構想

昭和51年に「登別学園都市構想」があったが、日本工学院が来るのみで、他校が来ることはなかった

今回の構想は、政策フォーラムの発展系として、各地の学生が集い、地域住民・NPO・事業者・行政でハード型の学園都市の形成ではなく、

長期休暇等を利用した交流型の「登別大学」なるものを構築する

その拠点として「市民活動センター」・「旧登別温泉小学校」を学生たちの学び舎として活用する



②－1

地域団体が情報の共有化・まちづくりの議論をする「プラットフォーム」の構築

現在、個々の団体の活動は、積極的に行われているが、登別のまちづくりを全体的に考える方向には至っていない

そこで、個々の団体が、情報の共有化を図り、まちづくりの議論をしていく場(プラットフォーム)が必要！



* 市民活動センター「のぼりん」は、受け皿となっているのか？
今後、まちづくりのプラットフォームとして、育てていかなければならない



②-2

「プラットフォーム」で横の繋がりをつくり 協働を実質化(小さな自治の展開)

場を設ける事により、地域団体の「横の繋がり」ができる

また、互いに理解し、意見交換を行えば、新たなアイデアや気づきが生まれ、まちづくりへ向けた、具体的な行動(築き)へと発展する



地域の中で補完・協働関係が生じる

「登別大学」を利用した学生たちが、ファシリテーターとして「プラットフォーム」に参画・協働することで、住民の思いが引き出され、まちづくりネットワークの構築が、促進される。

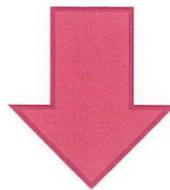


まとめ

内部資源としての、地域住民(新しいものを迎え入れる気風・風土)・NPO団体(モモンガ・いぶりたすけ愛等)・事業者・行政



外部資源としての、大学・学生(「登別大学」の利用)



ハイブリットな登別のまちづくりへ



附言

政策フォーラムで提言した内容は、行政だけが知るのではなく、まちづくりの主役である「市民」及び「地域活動団体」が知る必要がある。

学生が住民と行政の繋ぎ目になる事は必要であるが、まずは住民が一步を踏み出すことが大切なのではないか？
よって、政策フォーラムの発表の際、たくさんの市民に足を運んで頂ける様にリニューアルしていくべきだ。



ご静聴
ありがとうございました
＼(^O^)/
パチパチ・・・なんちって☆

